

講演



第35回全国大会にあたって

——30周年を3年後に控えて——

大 野 豊†

ただいまご紹介いただきました、京都大学の野でございす。今年及び来年、当学会の会長を務めさせていただきますことになっております。

このたび、この北海道大学で、この全国大会を大変盛大に開くことができました。北海道大学の方々、及び北海道支部の方々に大変お世話になりましたことを厚くお礼を申し上げたいと存じます。

それから、本大会の運営委員長であります、浦委員長を初め、運営委員会の方々、及び実行委員長の川口先生初め、委員の方々のお骨折に対し厚くお礼を申し上げます。

開会の初めに、恒例で会長が挨拶をすることになっておるわけですが、前会長は、いろいろアイディアの提案とか、そのほかされたのですが、私不幸にして、あまりいいアイディアがなかったものですから、この学会のいままでの移り変わりをちょっと振り返ってみまして、これからどのようにこの学会を考えていくかを、皆さま方にも考えていただきたいというわけです。また数年前に20周年記念行事を、当学会でやったわけですが、あと3年たちますと30周年ということになり、われわれの任期でその準備もしなければなりませんので、会員の皆さま方にもこの機会に、どんな行事をして学会を盛り上げるかということにつきまして、ぜひご意見もお伺いしたいと思っております。

本学会は昭和35年から始まったわけでございすが、非常にその成長が早いということは、皆さま方でにご存じであります。現状は会員が2万6千人ということでございすが、それがどのように伸びてきたか、これから伸びていく可能性はどうかなどを考えなければならぬわけです。

それでごく簡単ですが、今日はこのようなことを、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。

学会の推移

それではまず、会員が増えた様子を示したのがこの図-1です。実は、あまり馴れないワープロでやっておりますので、どうも下の数字が縦になったり、なかなかうまくいかないのですが、まあ勘弁していただきまして、会員が大体このようにエクスポネンシャルに増えておるわけですね。最後の破線はまだ半年きりたっておりませんので、たぶん終わりにはあの破線になるだろうということですが、そういうことで非常にきれいなカーブで伸びております。まだ、飽和してS字になるところまできてないのじゃないかと思います。これはたぶん、3万はずっと越えて、3万5千とか、4万とか、その辺までいく可能性はあるのではないかなと思っております。それはあまり遠くない日に、そうなるのではないかなと思っております。同じように、予算と決算などを図に書き出すと、同じようにきれいな

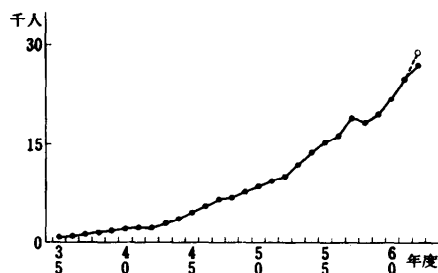


図-1 正会員の動向

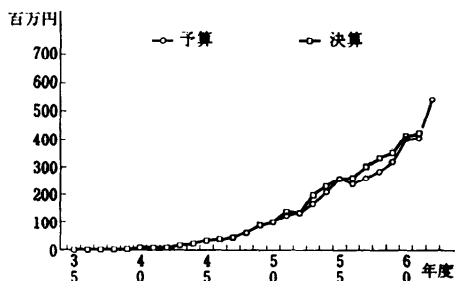


図-2 予算決算の動向

† 本学会会長 第35回全国大会の会長挨拶として行われたものである。

昭和62年9月28日 於北海道大学

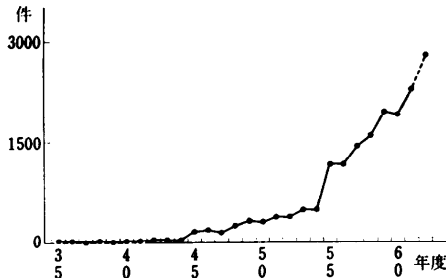


図-3 全国大会論文発表件数

エクスポネンシャルで伸びておるのですね。これはなにもエクスポネンシャルにしようと思って、毎年やったわけではないのですが、まあ、とにかくこうなる。まだこれ、どんどんと伸びる可能性があるわけで、非常に好調に進んでいることは、こういうカーブからみても、よく分かるわけです。

それから同じように、少し全国大会のことをお話しますが、全国大会の発表件数はやはりいままでのカーブより、さらに急激に伸びておりまして、エクスポネンシャルがさらに立っている。最後のこの破線のところは、まだ今年度は大会はもう1回、3月にありますので、それを合計したのを推定して大体あの辺にいくだろうということで図示したわけです。とにかく大体、年間3千件に近づいて、お分かりのように、皆さん非常に厚いプロシーディングをもって、重い重いと文句を言っておられるように思います。これは一方では非常に喜ぶべき現象であるということがいえるかと思えます。

で、後でお話しますが、全国大会については、またいろいろ考えていただかなければならない問題が、たくさんあるということです。

それから次は、機関誌なのですが、頁数についてこちらの方はあまりきれいなカーブというわけにはいきませんで、上がったたり下がったりですが、まあそれでも傾向としては、なんとかずっと上がっていったということなんです。

それで上がり方を見ますと、これはもうちょっと、機関誌は強化してもよいのではないか、もうちょっと上がっていてもよいのではないか、という気がしております。

ここで問題になりますのは、欧文誌でありまして、欧文誌が少し上がりそうで、上がっていないということでありまして、この辺はこれから大いに考えなければいけないということです。機関誌は本学会の産物としてもっとも重要な産物の一つであるわけですから、

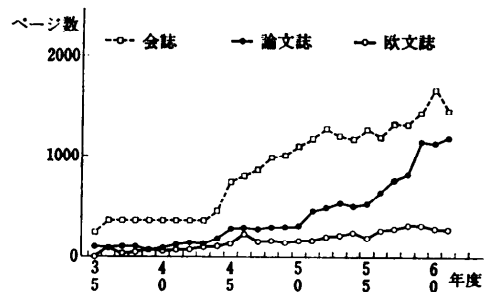


図-4 機関誌ページ数の動向

これについては全体としていろいろ検討すべきことがまだあるのではないかと考えています。

次は、機関誌の予算と、学会の総予算との関係ですが、機関誌のページ数そのほかが図-5のようなかっこうになっておりますがやはりお金にいたしますと、非常にきれいなカーブにのっておりまして、総予算に対する関係も、非常に自然な形になっているのではないかと考えております。

これを比率にいたしますと、先ほどちょっと申し上げましたが、機関誌の予算の比率、すなわち、総予算に対する、機関誌に対するお金のかけ方はどうなっているかといいますと、下がり気味でございますね。

これは先ほど言いましたように、機関誌については今までも、相当力を入れているのですが、さらに力を入れていかもしれない。これは他のたとえば電子情

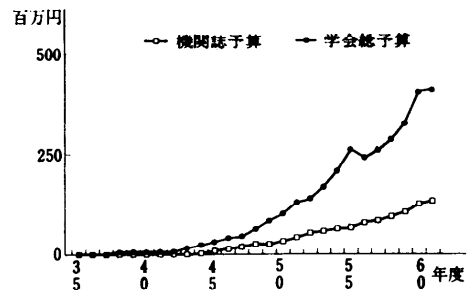


図-5 機関誌予算の動向

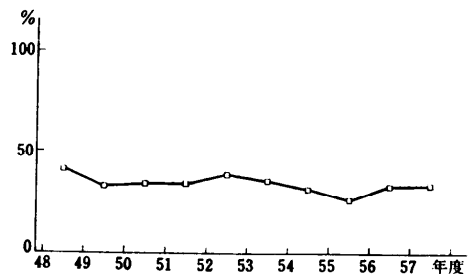


図-6 機関誌予算の比率

表-1 会員(会費)全国大会, 研究活動の動き

年度	正 会 員		学 生 会 員		賛 助 会 費		全 国 大 会	研 究 活 動		
	(数)	(費)	(数)	(費)	(数)	(費)	(論 文)	(委)	(会)	(登録数)
35	820	1,000	/	/	25社 (83口)	20,000	29(件)			
36	993	"	/	/	38 (97)	"	32	5		
37	1,223	"	/	/	55 (122)	"	21	5		
38	1,479	"	/	/	69 (138)	"	40	5		
39	1,842	"	/	/	78 (145)	"	23	6		
40	2,098	1,600	3	1,000	67 (125)	"	35	5	(月 例 会)	研究会 スタート (登録者)
41	2,219	"	19	"	70 (160)	"	40	3		
42	2,237	2,000	40	1,200	77 (169)	"	61	4		
43	2,829	"	29	"	86 (201)	"	60	4		
44	3,584	"	140	"	106 (216)	"	50	4		
45	4,605	3,000	193	1,500	112 (223)	"	184	6		
46	5,599	"	136	"	129 (236.5)	"	205	6		
47	6,610	4,800	179	"	125 (264.5)	30,000	166	6		
48	6,949	"	247	"	149 (269.5)	"	255	5	4	417
49	7,827	"	390	"	142 (245.5)	"	348	5	6	783
50	8,654	6,000	501	3,000	151 (255.5)	"	320	2	9	1,098
51	9,640	7,200	547	"	156 (260.5)	"	398	3	9	1,451
52	10,092	"	577	"	166 (271.5)	"	397	3	11	2,186
53	12,001	"	407	"	169 (271.5)	"	505	3	11	2,164
54	13,821		442	"	178 (285.5)	"	506	4	12	3,020
55	15,308	"	487	"	194 (301.5)	"	+) 621 547 1,168	6	12	3,224
56	16,319	"	649	"	242 (353)	"	+) 586 604 1,172	4	14	4,055
57	18,928	"	782	"	261 (375)	"	+) 708 747 1,455	0	16	4,759
58	18,333	"	901	"	277 (392)	"	+) 802 793 1,595	0	15	5,196
59	19,359	"	782	"	297 (419)	"	+) 898 1,058 1,956	0	16	6,595
60	21,786	"	860	"	316 (434)	"	+) 868 1,054 1,922	0	17	7,857
61	24,804	"	851	"	354 (472)	"	+) 1,181 1,111 2,292	1	18	8,296
62	26,850	"	900	"	400 (520)	"	1,399	1	18	

表-2 学会主催主要国際会議

年	略 称	共 催	出席者
1972	1st UJCC	AFIP	1,168
1975	2nd UJCC	"	1,200
1978	3rd UJCC	"	350
1980	IFIP CONGRESS '80	IFIP	2,264
1982	6th ICSE	IEEE-CS 外	1,299
1983	ICTP '83	CLCS	318
1985	VLDB/CHDL	IFIP 外	359
1986	ISCA	IEEE-CS 外	352
"	MCSE	IFIP	163
"	12th VLDB	VLDB-ENDOW. 外	356
1987	COMPSAC '87	IEEE-CS	予 定
"	IFIP/TC 7	IFIP	"
"	IFIP/WG 10.5	"	"
"	IFIP/WG 10.1	"	"
"	IFIP/WG 2.4	"	"
"	IWDM '87	ICOT	"

報通信学会などと比べますと、多少、パーセンテージが低いわけですから、そういう意味でも、もうちょっと情報処理学会としては、機関誌に力を入れることも必要かと考えます。

次は、研究会活動につきましては、お配りしました資料の中に、研究会の数がどのくらいあるかということが出ておりますので、それをご覧いただきたいと思いますが、一つ、お話ししたいのは、国際会議のことであります。

学会の国際会議といえますのは、いつから始まったかといえますと、ここにありますように、1972年に、当時アメリカの AFIP の会長である、リチャード・タナカという方からの申入れがありまして、第1回の「UJCC」、日米コンピュータ会議というのが始まったわけですね。

これは我が国では、まだ戦後それほど発展していない時期に情報処理学会ができてから10年と少したつてですが、将来 IFIP Congress を招くことができるよう、とにかく国際会議というものを経験しようということで始まったわけでありまして、これが第1回、第2回を日本で第3回を米国でと続いたわけです。

実は第3回では、私は Co-Chairman だったのですが、日本から米国に移してサンフランシスコで開催いたしましたのが、米国側の参加者が思ったより少なかったために、少額ですが赤字を出したわけです。それで日米両方とも、シュリンクいたしまして、しばらくお休みしようということで自然消滅の形になってしまいました。また、そういう経過がありまして、1980年にや

っと IFIP の Congress '80 が行われた。これは非常に盛大に行われたことは皆さんご存知のとおりです。

この経緯は全部 AFIP や IFIP の系統の会議であったわけですが、その後初めてその系統でない IEEE との共催で「6th ICSE」を学会主催でやったということです。それから学会の中でいろいろな申し合わせ、あるいは、規則をつくっていただき、国際会議が開けるようになってきたわけです。AFIP や IFIP 以外のいろいろな組織と共催で国際会議が開けるようになってきたわけです。

実は80年代も、初めのころはもっとたくさんやっていたのですが、学会はほとんど、主催、共催関係でなく後援ぐらいでやっており、主催はよその組織や学会がやっていたわけです。

国際会議の数が増えてきたということは、この学会の国際活動が非常に盛んになってきたという一つの証拠でありまして、この件につきましては、当学会としても、対応をさらによく考えていかなければならないのではないかと考えております。

これからの課題

あまり時間がありませんので、では、これから何をわれわれは考えていくべきかを表にしたのが、これです。まず研究会の活動はかなり活発に動いていて、研究会もたくさんできているわけです。実は 電子情報通信学会の研究会の様子を見ますと、もう一つ情報処理学会は活動が盛んでないという言いすぎですが、比較して、もう一つだということがあります。

それをどのようにしていったらよろしいかということとは、これからの学会の運営とからみまして、大いに検討していくべき必要があるのではないかなと思っております。これはわれわれ、理事会の方でも、委員会その他をつかって考えているわけでございますが、皆さま方もこうしていったらいいというようなご提案を、どんどんいただければありがたいと思っております。

それから先ほど申しました機関誌のことですが、いまもっとも問題になりますのは、欧文誌のことであり

表-3 これからの課題

研究活動
機関紙
国際活動
全国大会
関連諸学会との関係
学会の運営
30周年記念行事

ます。欧文誌がどうも伸び悩んでいるので、そのあり方の検討を含めまして、機関誌全体について考えていく必要があるのではないかと思います。

それから先ほど、最後に出ました国際活動のことで、国際活動のことは、一つには、さっきお話をしたいろいろな国際会議はすべてあちら製の国際会議なのです。AFIP の方でいい出して「UJCC」をやったとか、IEEE でやってる会議を、頂戴してきて、こちらで会議を開くとか、そういうようなことがずっとあったわけですね。

いまの日本の立場を考えるとそれでいいかというわけです。多分アメリカは戦後、日本を復興させるべく、いろいろやってくださったわけですが、日本がいまどういう立場にいるかということを考えますと、アジアとか、途上国がいまかなり情報について盛んになってきたわけですから、それに対して配慮しながら、やはり日本の主導の会議とか、そういうようなことを計画する責務みたいなものがあるのではないかと思います。これは、欧米に対して同じようなことを考えるべきではないかなと思っています。

先ほど申しましたように、全国大会は大きくなりすぎ、単なるお祭りとなって、面白くない、という声が出てきます。これは以前から学会内では問題として議論されておりましたが、もっと魅力的な大会にすることについて、会員の皆さんからも、大いに意見をいただいてなんとか良い方向を出したいと思っています。

それから関連諸学会との関係の問題ですが、これは現在、電気、4学会と、非常にある意味では連合的に大会を開いたりなんかいたしまして、緊密化を進めるということが行われているわけですが、情報処理学会としましては、それだけでは問題があります。最近できました人工知能学会とか、日本ソフトウェア科学会とか、そのほか情報関連の学会がいくつもできておまして、それらの学会との関係を、やはり緊密にしながら、お互いに切磋琢磨する必要があるのではないかと。それらとの関連もこれから大いに考えていく必要があるのではないかと思います。これは学会、お互いのためにも必要なことではないだろうかということで、学会内にその委員会をつくって検討していただいているわけです。

それからこういうことを通じまして、学会の運営ということを考えますと、だんだん大きな学会になってきて、ある意味では、いまの学会の在り方というの

は、学会が小さい時代から、大きくなるにつれて、そのつど、運営がうまくいくように考えてやってきたわけですが、それがそのまま、いままでの延長線上でいいかどうかということは、非常に問題があります。

特に非常に重要なのは、研究会活動をどういうふうにもっていくかということ、これはむしろ研究会の自主性をさらに増すような方向で活発化していく必要があるのではないか、という考え方があるわけです。

そういうようなことを通じまして、学会の運営全体を弾力的に考えるということが必要なということを考えておりますが、この辺につきましても、これは会員の皆さま方のいろいろなご注文、ご意見が、ぜひ必要ではないかと思っております。

それで実はそういうようなこと、あれやこれや皆さまとで相談しながら、いまは進めておりますが、30周年の記念行事というのがありまして、すでに20周年をやっておりますので、それにならって30周年を計画中でございます。いまはここにあるようなこんなようなことを考えて、項目をあげております。これも、まあ、そう変わったこともないものであります。この中で記念国際会議というのが一つ、これはぜひ情報処理学会主導で、よその学会からもらってきたものではない、そういう国際会議をやってみようではないかというのが、一つ、あるわけでございます。

それから「未来検討会」でございますが、学会の在り方として、すぐには解決つかない問題が、たくさんあるわけでございますので、そういうことを踏まえまして、これから10年、20年先、学会をどのようにもっていくかという、学会のビジョンをつくることも、この際考えてみたらどうか、というわけです。

特にこのなんといひましても、地価が高騰した段階で、事務所その他が非常に窮屈な状況になってきて、せっかく広い新しい事務所へ移ったわけですが、やはりいまの学会の規模その他からすると十分ではないわけですので、その辺もこれからどうもっていくかも考えていきたい。これはむしろ、一情報処理学会だけの問題ではなくて、他の諸学会をもふくめて、また情報処理関係の産業全体をからめた上で情報処理学会

表-4 30周年記念行事(計画中)

記念式典
記念全国大会
記念国際会議
学会30年の歩み
記念論文
未来検討会

の在り方を考えて、将来の姿というものを描いていく必要があるのではないかと考えております。

以上で、今日お話ししたいことは、結論もなにもなくてこれから皆さま方にもお考えいただきたいということをお話いたしまして、私のお話を終わりたいと思いますが、こういう学会といいますのは、われわれ、あるいは、研究会に参加される方々もそうありますが、ボランティア活動が主でございまして、学会の委員や役員は、特権的な意識をもって、なにかうまいことをしようというような考え方で参加していただきますと、非常に失望を感じるわけでございますので、これはあくまで学問や技術のためのボランティア活動で

あるという意識で、学会のために尽すのだと考えていただかないと、学会の運営はうまくいかないわけでありまして。そういう意識をもって、大いに学会に尽していただくということが、また、情報処理関係の学問の分野の発展にも寄与できるのではないかと考えております。

そういうことで、皆さま方にも、ぜひその辺のところをときどきお考えいただきながら、こういう活動に参加していただければと思っております。

以上、簡単ではありますが、私の挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。